

## フロベール『感情教育』における 〈無気力な情熱〉と崇高の問題

橋本 由紀子

Yukiko HASHIMOTO. "Inactive Passion" and the Sublime in Flaubert's *Sentimental Education* *Studies in International Relations* Vol.40, No.2. February 2020. pp.25-35.

Gustave Flaubert described in his story *Sentimental Education* (1869) the "Inactive Passion" characteristic for the people of his own generation. He made the violent period during the February Revolution in 1848 the background of this work but the young people of those days searched for ideals beyond the harsh realities of life, in particular for a "sublime lover" or "divine love". The story tells of the phantasy and disenchantment of a common bourgeois young man focusing his romanticist passion on a certain woman.

However, Flaubert detested the romanticist tendency to make excessively easy use of spiritual terms because love and religion were enormously substantial subject matters in the holy realms of his art.

In the following paper, I will examine the relationship between the "Inactive Passion" of the main character and Flaubert's continued request for "sublimity" in his own literary work.

ぼくは今、パリを舞台にした現代の風習に関する小説に、一ヶ月前から取りかかっています。自分の世代の人々の精神史を記してみたいのです。「感情にまつわる」と言った方がいいでしょう。これは愛と情熱についての本ですが、現代に存在し得る情熱について、つまり無気力な情熱についての物語なのです。<sup>1</sup>

この書簡の一節は、フロベールが『感情教育』(*L'Éducation sentimentale*, 1869)の執筆を始めた1864年に書かれた。執筆の動機として、まず自分の世代の「精神史」が挙げられ、それが「感情史」つまり「恋愛感情にまつわる」と言い直される。作品の主題は「愛と情熱」で、その情熱は「現代に特徴的な無気力な」と説明される。『感情教育』は、フロベールの作品では例外的に主人公の名前を冠さないタイトルである。ただしそこには「ある若い男の物語」(*Histoire d'un jeune homme*)という副題が付されている。この「若

い男」は主人公フレデリック・モローというより、先の書簡に記されているように、「自分の世代の人々」に属する一青年を示していると考えられる。この世代は七月王政末期から二月革命(1848)、六月暴動(同年)、クーデター(1851)を経て第二帝政に至る、激動の青年期を過ごす。

十九世紀前半はロマン主義の時代であり、個人の感情の解放が謳われた一方で、多くの青年たちがこの激しく移り変わる社会と自己との間に乖離を感じ、世紀病と言われる憂鬱な空気の中にいた。そこで彼らはしばしば現実から目をそらし、高貴な魂、天上世界の美といった彼方の理想を追い求め、ペトルルカのラウラ<sup>2</sup>のような崇高な恋人や聖なる愛を描き出そうとする。フレデリックはまさにこのロマン主義に浸り、夢想と幻滅に支配され、恋愛に聖性を見出す人物である。

フロベールは青年期にロマン主義の影響を受けたものの、その後一転してその作品群を、感傷的な形容詞を乱用して崇高を卑俗な地平で語る文学と批判する。また自分が生きた時代を、全てが均

一化された愚鈍なブルジョワ社会として忌み嫌っていた。『感情教育』は、十九世紀ブルジョワ社会に生きる、紋切型の言葉に支配された人々の「感情の愚かさの物語」<sup>3</sup>と見なされている。しかし本稿では、こうした時代に生きる青年の「無気力な情熱」が描く世界を、フロベールにおける「崇高」の視点から見つめてみたい。フロベールにとって、宗教と愛は人間の最も自然で詩的な感情を生み出すものであり<sup>4</sup>、美を仲介して人間の真実を描き出す芸術は、宗教以上に崇高なものだった<sup>5</sup>。『感情教育』においては、フレデリックの生が、アルヌー夫人というラウラへの宗教的な、言い換えれば「崇高」に向けられた恋愛感情によって導かれる。

## 1. 凡庸な青年の物語

『感情教育』というタイトルを冠しながら、この物語には「教育」が本来もたらす成長や成熟がない。この小説は、凡庸なブルジョワ青年が、運命的な出会いをした女性に対して、本来は人生の試練になるべき恋愛感情を抱きながら、また自分たちが参画すべき革命の時代に身を置きながら、いかに無為に青年時代を過ごすかの過程を描く。フロベールは青年の成長物語という定型を、独自性のない総称的な主人公によって破った最初の作家と見なされる<sup>6</sup>。バルザックの『谷間の百合』(1836) やスタンダールの『赤と黒』(1830)の主人公は、『感情教育』と同じく貞淑な人妻とのかなわぬ恋愛を描くが、彼らは強い意志や行動力をもって目的に突き進み、獲得か喪失かの挑戦に生命を賭す野心を持つ。それに対してフレデリックは作中で「あらゆる種類の気の弱さを持つ男」(446)<sup>7</sup>と説明される。この「弱さ」が、それまでの主人公と一線を画す。フレデリックは一通りの教養は備え、将来への野望もあるが、確固とした信念を持たず、一貫して非行動的で臆病な人物である。この青年は「生きる代わりにたえず逃げ回っている」<sup>8</sup>。その場の感情次第で政治的野心も決意も弛緩し、恋愛感情すら周囲の状況に応じて拡大したり収縮したりする。ヘンリー・ジェイムズはフレデリックを、「この時代特有の外的生

活の貧弱さと内面の乏しさを備えた人物」<sup>9</sup>と評する。この青年は完全に紋切型の言葉や考え方に支配されており、愛読するロマン主義文学も全て「情熱」というテーマで一括りにし、そこで読んだ言葉を平均化して自分の情熱に当てはめようとする、ナルシスティックな愚かさを持つ。

しかし崇高とは本来、極限的なところに生み出されるものだろう。フロベールも書簡で、「人は殉教によってしか天に向かえない。天上の世界へは、荊の冠をかぶり、心臓を貫かれて、両手を血に染めて、光り輝く面を上るものだ」<sup>10</sup>と述べている。何かを突き詰めることのないフレデリックに、それではどのように崇高が関わってくるのだろうか。

フレデリックの「崇高」は何よりもまずアルヌー夫人に繋げられる。理想と崇められる女性への聖なる恋愛感情は、まさにロマン主義的な崇高の図式を示す。しかしこの作品ではそれがパロディ化されている<sup>11</sup>。それでもフレデリックが夫人に見る理想には、「到達不可能なものへの無限の希求」を反映した宗教感情が孕まれる。また、崇高な女性としてのアルヌー夫人像は、作家の思い出への偏愛と神聖化、すなわち初恋の人への生涯続く敬愛を反映している。フロベールが十五歳の時に北フランスの海岸で電撃的に恋に落ちた当時二十五歳の人妻の、黒い髪、黒い瞳、日に焼けた肌は、そのままアルヌー夫人にうつされている。『感情教育』において、その姿がフレデリックの目に映った瞬間は、フランス文学史上最も美しい出会いの場面とされる。

## 2. アルヌー夫人の「出現」

それはひとつの幻のようだった。(Ce fut comme une apparition.)

彼女はベンチの真ん中に一人で座っていた。少なくとも、青年の目を打った眩しさに、他の人間の姿は見分けられなかった。(中略) 筋の通った鼻、あご、その全身が空色の背景の中に、くっきりと浮かび上がっている。

(中略)

今まで、これほどの小麦色をした肌のつや、

胴まわりの美しさ、陽に透き通って見える指のしなやかさを見たことがなかった。青年は女性の裁縫籠を何か不思議なものでも見るように、呆然と眺めていた。何という人だろう。住所は、身の上は、その過去は。この女性のいる部屋の家具、今まで身につけた衣装、付き合った人、全てを知りたい心地がした。そして、肉体的な欲望さえ、それよりもっと深い望み、果てしない、苦しいほどの好奇心の中に消えてしまっていた。(46-47)

最初の一行に記された「幻」(apparition)は、「出現」の意味も持つ。アルヌー夫人は大抵いつも、フレデリックの前に突然姿を現す。出現は驚きをもたらし、驚きは畏怖の感情のひとつとなる。この「出現」という語は当時、聖母マリアの出現を示す表現だった<sup>12</sup>。聖母の出現は、ルルドの奇跡をはじめ十九世紀フランスで注目されたマリア信仰の表れである。その背景のひとつには、フランス革命後の新たな社会制度で重視された、家庭の守護者としての母性とその神聖化がある<sup>13</sup>。聖母のイメージは、この最初の場面から最後までアルヌー夫人に付いてまわる。

アルヌー夫人はほとんどの登場場面で、光に包まれている。この場面では眩しさ、そして空色の背景として光が記され、光が通ったことを示す小麦色の肌や指先に透き通る光は、この女性に反射する輝きを強調する。特にこの背景の青という色は、実写的には晴れた空やセーヌ川の水面と捉えられるが、ここでは具体的な背景というよりもかなり抽象的なイメージを生んでいる。青はまず聖母を象徴する色であり、理想世界を示す色であり、何よりフロベールがしばしば皮肉をもって語る「ロマン主義的な色彩」<sup>14</sup>でもある。この宗教的で詩的な背景に浮かび上がることで、夫人は「他の人間の姿が消去された」、たった一人の崇高な女性としてフレデリックの目に入る。さらに最初の一行で、幻「~のよう」(comme)とされることで、この出現がフレデリックに、夢想とも現実ともつかない感覚をもたらしていることがわかる。ヴィクトール・ブロンベールもアルヌー夫人を、「ひとりの人間を超える存在」、「ひとつのイ

メージ、あるいはむしろひとつのヴィジョン(幻影)」<sup>15</sup>と説明する。まさに現実を超えたものの「出現」である。裁縫籠までが「不思議なもの」に見える感覚や、「肉体的な欲望」より「深い」、「果てしない」、「苦しい」という感情は、相手の物理的所有ではなくひたすら崇拜の対象に向かおうとする、ひとつの宗教体験のはじまりを示しているといえるだろう。

アルヌー夫人の人物像は、フロベールが造形した女性の中でもボヴァリー夫人を超える傑作と見なされる。アルベール・チボーデは、ボヴァリー夫人を「永遠のイヴ」とし、アルヌー夫人を「マリー(マリア)名前の通り聖なる清純さをもつ女性」<sup>16</sup>と評する。ただしこの女性の姿は、恋する青年のまなざしを通して描かれていることに注意すべきだろう。確かに夫人は周囲の人々に「まさに徳高いひと」(599)と称賛されている。しかしフレデリックの友人デローリエは、「悪くはないが、別にこれという特色は何もない」(122)と言い、躊躇なく夫人に触れようとする。アルヌー夫人は客観的には凡庸なブルジョワ女性であり、作中で発する言葉も良識に満ちた当たり障りのないものにすぎない。フレデリックが夫人に見出す聖性も、そもそも母性や貞淑さといったありきたりなイメージから発する。それでもそのイメージは無限に広げられて、アルヌー夫人は絶対的な女性として祀られることになる。

彼女はロマンチックな書物に出てくる女性たちに似ていた。フレデリックはその姿に何一つ加えることも、何一つ削ることも嫌だった。宇宙が俄に広がったようで、この女性は全てのものが集中する輝かしい点だった。馬車の揺れに快く身を任せ、半ば閉じた瞼から遠くの雲を見つつ、彼は果てしない夢幻的な喜びに浸っていた。(53)

アルヌー夫人は、読書の中でフィクションとして見ていたものが現実の形をとった、「欠けるものも過剰なものもない」完全な理想の女性となる。あらゆる聖なるものは世界の中心として捉えられるが、こうして「輝かしい点」とされる夫人

を中心に世界が果てしなく広がっていくイメージは、作中で何度も繰り返される。『ボヴァリー夫人』でも、レオンがエマに「あらゆる小説に登場する恋の女、あらゆる劇のヒロイン、あらゆる詩集の漠然とした〈彼女〉」<sup>17</sup>を当てはめていたが、フレデリックはさらに、書物の女性のみならず、現実世界のあらゆる女性、「娼婦も歌手も馬に乗った婦人も通りを歩く女性たちも」(134)、絵画の中の女性も歴史上の女性も、パリの街角にある婦人用の品々も、さらにはパリの街全体をも、アルヌー夫人に収斂させるようになる。

### 3. 視線と情熱

アルヌー夫人を中心とした聖域は、フレデリックの視線によって作られる。この作品では「見つめる視線としての男、見つめられる身体としての女」という近代小説特有の構図が徹底され、アルヌー夫人の視点はほとんど見られない。これは、やはり青年が人妻に捧げる熱烈な愛を描いたバルザックやスタンダールの小説とは大きく異なる。これらの物語では、青年は愛する女性の獲得に向けて命をも賭す野心と行動力を持つが、フレデリックは行動するかわりにただひたすら愛する女性を見つめる。出会いの場面では、「恋に落ちる」というひとつの事件が、一枚の絵画をたどるように視覚的に語られていた。物語は視線によって進められ、恋愛感情もまなざしの中で進展していく。

(画家ペルランの芸術論を聞きながら) フレデリックはアルヌー夫人を見つめていた。耳に入ってくる言葉が彼の心の中で、燃えさかる炎に落ちていく金属片のように情熱の中に溶けていき、恋を形成していった。(104)

これは、最初の出会ってから長く待ち続けた後に、ついにアルヌー一家に招待された夜の場面である。夫人の声ではなく他人の声が、夫人への賛辞ではなく脈絡なく届いてくる美にまつわる用語が効果的な燃料となり、見つめる快樂の内に恋愛感情を鑄造していく。フレデリックは引き続き、「瞬きもせず」、「相手のあらわな肩に軽く触れて

いる髪飾りの房を」見つめ、「そこから目を離さず、この女性の肌の白さの中に自分の魂を浸透させ(enfoncer)」(106)ていく。「enfoncer」は「杭を打ち込む」という意味を持つ。フレデリックは視線で相手に何かを伝えるのではなく、目を上げて顔を見ることもできず、ただ目の前にいる夫人に、その内部まで視線を突き立てようとするのである。

そうしたアルヌー夫人への視線は会う回数が増えるたびに激しく深くなっていき、やがて明確な「宗教体験」が訪れる。それは、アルヌー夫人の視線が自分の視線と交わる瞬間だった。

時々夫人はじっと彼を見つめながらほほえんだ。するとフレデリックはそのまなざしが水底まで下りてくるあの陽の光のように、自分の魂に入り込んでくるのを感じた。彼はもう下心もなく報いを期待する気持ちもなく、一心にこの人を愛していた。そして、感謝の心の迸りに似た無言の歓喜に打たれて、相手の額にキスの雨を注ぎたい気持ちがこみあげた。やがてずっと奥から湧く気持ちの波に持ち上げられて、自分の外に出てしまうような心地になった。すぐにもこの身を捧げたい欲求は、それを満たせないためなおさら熾烈だった。(155)

夫人のまなざしは、自分に浸透してくる光として描かれている。神聖な光はそれを仰ぐ者を包み込み、変容させる。この一節には「愛する」の副詞に「一心に」(原文では *absolument*、絶対的に)が使われ、ひたすら対象へと向かおうとする忘我の崇拜が示される。さらに「波に持ち上げられて」、「自分の外に出てしまう」心地、己を放棄して相手に身を投げ出す衝動という、神秘体験を想起させるあらゆる心の動きが見出せる。歓喜を伴う自己の外への融解の感覚は、フロベール自身も体験してきた神秘体験そのものに見える<sup>18</sup>。

フレデリックが求めるのは、愛する対象への視線を起点に、妄想という非現実の仮定の上に築かれる恋愛関係だと考えられる。フレデリックにとって、不可能性の確信は可能性の否定ではない。

フレデリックは獲得することよりも求め続けることにこそ快楽を覚え、不可能でないわけでも、可能でないわけでもない状態を保とうとする。パリ近郊のオートウイユで、アルヌー夫人と心を通じ合わせて二人きりで過ごす蜜月の期間でも、自分から手を出したくないという消極的姿勢が貫かれ、この女性を得られるかもしれない「可能性」に快楽を見出す。そうしてただ見つめあう幸福感は、「もうひとつ奥の完全な幸福さえ忘れてしまうほどの酔い心地」(407)をもたらす(傍点論者)。フレデリックの情熱は、完全ではなく不完全に対して、いわば完全へと向かう過程へと向けられるのである。

#### 4. 聖化と洗聖

フロベールが描く恋愛感情は、まなざしを通して、愛する対象をその人だけにとどまらず周囲のものや場所、さらには周囲の人々や恋敵にまで拡大し、融合し、遍在させる。フレデリックもアルヌー夫人の持ち物、住まい、街に夫人の存在を広げ、さらには夫アルヌーまでを夫人の一部と見なす。ここに見られるのが、モノや人に聖性が宿る「受肉」(Incarnaton)のテーマである。

恋する視線は見つめる対象を「祝別」し、それが「受肉」をもたらす。「祝別」の原語はラテン語の consecratio で、「奉獻する」という意味を持つ。それは「祝福」(benedictio)に留まらず、あるものを神に捧げ神のものとする、つまり日常世界から対象物を離れさせ聖域へと移行させる、ひとつの儀式を意味する。祝別によって、目に見えるものに目に見えない神的な存在が宿ること、あるいはその状態が、受肉として捉えられる。

フロベール作品において、愛は常に受肉へと向かう。人物が誰かに情熱を燃やす時、その情熱は、相手その人以上に、その人の周りに広げられ、周囲の事物自体が特別な価値を得ていく。そこにあるのは、それまでの小説にあったような、恋愛対象の獲得へと突き進む行動ではなく、対象との超自然的な結びつきをめざす神秘主義的な愛である。アルヌー夫人はまず、フィクションの世界に住む理想が受肉した女性だった。次いで、フレデ

リックは直接触れることのできないその女性の存在を周囲に波及させて間接的な接触を試み、さらには自分も彼女の一部となることを欲する。しかし崇高を追い求めるまなざしは、その人を直接感じたいと欲しつつも、結局のところ周囲にその人を移していくことで、その人自身を手の届かない領域へと投じてしまう。

夫人と顔を合わせる機会が増え、視線を深め、夢想を強めるほど、フレデリックはますますこの女性が遠ざかるのを感じる。

アルヌー夫人を以前よりもよく知ったにもかかわらず(おそらくそのために)、彼はさらに昔よりさらに臆病になってしまった。(中略) 夢想の力で、彼は夫人を人間の境地の外に置いてしまっていた。この人の側にいると、自分は彼女の鉄から切り落とされる絹の糸くずよりも取るにたらないものだと感じられるのだった。(273)

アルヌー夫人はやはり「人間の境地の外に」置かれ、夫人が触れるもの一鉄や糸くずにまでその超越性は及ぶ。それに対して信奉者としての自分は、「それよりも価値のない」卑小な存在にされる。ここで両者は両極に分離するというよりは、共に日常から逸脱した宗教的領域に入っている。夫人を崇高なものとし、周囲を神聖化しているのは、「臆病」というフレデリックの弱さであり、そこから生じる「夢想の力」である。そもそも宗教(religion)とは、絶対的な存在と自分との間に決して越えることのできない深淵を認めることを意味する<sup>19</sup>。フレデリックは出会いの船の上でも、読書する夫人を見て「見れば見るほど二人の間の深淵が深まっていく気が」(51)していた。この深淵を前に、青年は受肉したモノや空間や人を介して、その人の漠然とした雰囲気の中で呆然と佇むしかない。

ところが、満を持して崇拝の対象に触れるために行動が起こされる場面が、物語の中ほどに置かれている<sup>20</sup>。第二部六章、フレデリックはパリのトロンシェ通りに家具付きの部屋を借り、逢引きの約束を許したアルヌー夫人を迎える準備をする。

それから三軒の店をまわって一番珍しい香水を買い、赤い木綿の悪趣味な掛布団と取り替えるためにまがいの透かしレースを手に入れ、青い繻子のスリッパを一足選んだ。(中略)そして、仮祭壇を作る人々よりも敬虔な気持ちで、家具の位置を変え、自分でカーテンを掛け、薪は暖炉に、スマレは箆筒の上に置いた。できることなら部屋中に金を敷き詰めたかった。(411)

この部屋は聖体祭の仮祭壇 (repositor) に譬えられる。聖体祭では、聖体 (ホスチア) を収めた聖体顕示台が街中を練り歩き、大抵屋外に設置される仮祭壇へと向かい、そこでミサがあげられる。人々はこの仮祭壇に自分たちの宝物を寄付して飾り、信仰を示す。フレデリックは神に信仰を捧げるそうした人々「よりも」強い信仰心を自負している。ただしこの部屋に対する聖体祭の譬えには、キリスト教の聖なる世界と、人妻との姦通という策略の世界とが混ぜ合わされるといふ、強い皮肉が見える。

この場面までの「受肉」は、アルヌー夫人がいるところ、あるいはいたところや触れたところで行われていた。パリはアルヌー夫人がいるからこそ光り輝き、アルヌー一家の小間物は夫人が触れたからこそ特別な価値を得た。しかしこの部屋にはいまだ夫人の姿はない。だからこそ、奇跡の瞬間への希望が頂点に達する特別な場となる。この時、仮祭壇は世俗の世界に、寝室は聖なる世界へと入り込んでいる。仮祭壇も愛を交わす寝台も、共に肉体に関する実体変化の意味を持ち、いわば二つの受肉行為が重ね合わされる場となる。ここは、実体変化した神の体 (アルヌー夫人) に接触して一体化する儀式が行われるはずの、特権的な場となっている。この部屋はアルヌー夫人との関係を成就させるためだけに一時的に借りられた、神秘体験としての融合の、やはり可能性に捧げられた祭壇なのである。

結局のところこの部屋にアルヌー夫人はやって来ない。夫人は約束の日、息子の高熱にまだ犯されない姦通の天罰を感じ取り、「自分の初めての恋を、たった一つの弱い心を、全力で、自らの心

を天に投げかけ、燔祭の生贄を捧げるように神に捧げる」(419)。燔祭 (holocaust) は神への供物が祭壇で焼尽される、供儀の中で最も高貴な、祈願と贖罪の儀式である。この全身全霊をかけた母親の祈りは、フレデリックのナルシスティックな欲望に対置される。子どもは助かり、フレデリックの神秘体験はかなわない。しかしこの聖なる部屋はこの後、別の儀式を迎える。

フレデリックの「仮祭壇」は、そこに置かれたスマレの花がまだ枯れないうちに洗聖の場となる。そこに招き入れられるのは、青年が身体の関係を持った高級娼婦ロザネットである。

その時、憎悪が昂じて、心の中でアルヌー夫人をより強く辱めたい気持ちから、トロンシェ通りの建物へ、その人のために用意しておいた住まいへと、ロザネットを連れていった。

祭壇の花はまだ枯れていなかった。透かしレースは寝台の上に広がっていた。フレデリックは箆筒から小さなスリッパを取り出した。ロザネットはこれほどの細やかな心遣いを喜んだ。(422)

聖化の段階では「より敬虔に」(plus dévotement) と優等比較級で強調されていた信仰心は、ここでも優等比較級で、今度は「より強く神聖を汚す」(mieux outrager) と表される。神的存在に捧げものをする行為が使用不可能な聖域へと事物を移すことであれば、洗聖の動きは「反対に人々の自由な使用へと返還すること」を意味する。ジョルジョ・アガンベンによれば、こうした使用は自然なものとしては現れず、洗神を通してのみ可能となる。そしてその返還の儀式は「接触」によって行われる<sup>21</sup>。ここでは性欲の対象としての女性、ロザネットとの情事に当てはめられるだろう。神聖を汚すとは、神々のために取っておかれたものに、儀礼に参加する人間が触れることで、それが神聖でないものに変貌することを意味し、これもひとつの供犠の流れの中に位置付けられる。「神聖な」(sacer) というラテン語の形容詞が「神聖で侵しがたい」と「不浄で呪われた」という、相

反する意味を持つように（接触への忌避が共通項となる）、「神聖を汚す」（profanare）という動詞には「犠牲に供する」という意味もある<sup>22</sup>。

ここで注目すべきは、生贄が俗から聖へ、聖から俗へと移行する領域である。そこでは神的領域が人間の領域に脱落しつつあり、人間は神的なものの中に侵入している。トロンシェ通りの部屋は一旦聖化され洗聖される、いずれにせよ儀式の場としての機能を果たした。ロザネットに触れたことは、アルヌー夫人へ触れられなかったことと表裏一体である。ロザネットもこの儀式においては、アルヌー夫人への媒介者であった。その意味で、この女性にも夫人の受肉が認められる。フレデリックはしばしばアルヌー夫人を思い浮かべながらロザネットに接する。そこで生じるズレ—ここでは「これほどの細やかな心遣いへの喜び」—は、常に洗聖の悲しいグロテスクをもたらす。

## 5. 情欲と崇敬、卑俗と崇高

キリスト教の歴史において、精神は崇高、肉体は罪へと結びつけられ、神へと向かう信仰と、肉体的欲求を伴う恋愛とは長らく対置されてきた。しかしこの小説において、信仰と肉欲、アルヌー夫人とロザネット、あるいはそれぞれの女性が孕む聖性と性的な力は、対立するものではなく絡まり合うものとなっている。

フレデリックは常にアルヌー夫人の性的なイメージを取り払おうとしている。アルヌーが妻の肉体的な魅力を口に出すと、青年は即座に不愉快さを露わにしてその場を去る。夫人の姿は「衣服を着ている姿でしか思い浮かべることが」できず、「性は神秘的な影のうちに隠れてしまっている」（135）。ジャン＝ピエール・リシャールによると、衣服は他者の欲望から肉体を守る障壁になると同時に、肉体に個性を付与するしるしにもなるもので、禁じられた愛にまつわる聖性を示して、見えない肉体を理想化する役割を果たす<sup>23</sup>。しかし官能的な側面が、アルヌー夫人から完全に欠落しているわけではない。本来性的欲望と畏怖の念とは切り離されたものではなく、連動し融合するものだった。本能的な性衝動には、常に不安や恐れが

付随する。フレデリックは性的なイメージを避けながらも、アルヌー夫人に対して「凶暴なまでの情欲」を覚えている。肉体的な欲望が刺激されるからこそ、タブーとしての聖性が強く意識されるとも考えられる。フレデリックの恋愛感情も、宗教的光輝を前にした情欲と畏敬の念との葛藤の内に継続していく。

フレデリックはそうして自分が世間的な恋愛より「貴重で、気高く、強い」（144）情熱を燃やしていると独言する。しかし実際のところ、フレデリックの情熱はそこまで強くも気高くもない。基本的にナルシストでエゴイストな青年は、より簡単に触れることのできる他の対象へと向かう。宗教的な情熱を唯一無二の女性に捧げると言いながら、その恋心は爆発するように高まる時があれば、時に限りなく弱まる。アルヌー夫人への情熱は、時にデローリエとの友情へ、とりわけ他の女性たちとの関係に振り替えられる。それはエピローグでフレデリック自身が「自分はまっすぐ一本の道を歩き損ねた」（624）と回想する言葉にも示される。中でも特にロザネットは、先に見たように、アルヌー夫人との関わりの中で重要な役割を果たしている。

アルヌー夫人とロザネットに向けられる二つの情熱は、分離されることなく「一つは情熱的で面白く、もう一つは象徴的で宗教的な」、「二つの音楽のように」（240）調和し混ざりあう。娼婦として、ロザネットは肉体的な愛の対象となるが、そこには性欲だけではなくアルヌー夫人に向けられていた愛情も入り込み、やがて妊娠によって、夫人に特権的だった母性も体現することになる。創作ノートを見ると、二人の女性はごく初期から、「娼婦（後のロザネット）が徳高く宗教的になり、モロー夫人（後のアルヌー夫人）が反対に美德を損ねる」<sup>24</sup>と記されていた。アルヌー夫人が美德を損ねることはないが、二人は構想の段階から、聖性と洗神性とを、分担するのではなく交錯させていた。アルヌー夫人が特別な女性であり続けるのは確かで、ロザネットは基本的には代替者となっている。それでもこの女性は常に二番手にいるわけではない。フレデリックの情熱が唯一完全に心も身体も充足感に満たされるのは、ロザ

ネットと共にフォンテーヌブローの森で過ごす数日なのである。

森の厳かな空気が彼らにも伝わってきた。いつまでも黙ったままで、動かされるままになって、静かな陶酔の中に浸っていた。(中略)彼女の方に寄りかかると、その肌の瑞々しさが森の強い香りと混じり合った。

(中略)命の終わりまで自分が幸福であることは疑えなかった。それほどこの幸福は当然で、自分の命とこの女性の身体の中にこもっているように思われるのだった。(484-486)

森の中で味わわれる「静かな陶酔」の中で、ロザネットは野生の美しさを体現する。アルヌー夫人に感じる陶酔は彼女に向けられた視線の中に妄想と共に生じたが、ここではより肉体的な感覚である嗅覚や空気の肌触りが酔い心地を醸し出す。アルヌー夫人への情熱は、現在ではなく過去や未来の可能性に送られるものだったが、ここでは満たされた今が全てを支配している。しかし果てしなく続くはずだった幸福感は間もなく色褪せる。野生の美しさは野卑な浅ましきへと転換され、やがてロザネットの教養の欠如は青年をうんざりさせる。

アルヌー夫人は崇高な存在でありながら時に世俗性を与えられ、ロザネットは卑俗性を与えられながら時に神秘性を帯びる。宗教性は、自然と超自然、人間と神、俗と聖を接近させようとする動きの中に見出され、魂と肉体の混合はあらゆる宗教体験の中心に据えられる。アルヌー夫人とロザネットは、共に両義的な側面を見せながら、フレデリックがその時々どちらにも傾くことで、互いに重なり合い微妙な調和をもってそれぞれの崇高性を垣間見せる。この作品ではもう一人、上流階級の非日常世界すなわち金銭的に崇高な世界に属するダンブルーズ夫人という女性も青年の情婦となるが、崇高と金銭の関係については別の機会に論じたい<sup>25</sup>。

こうした女性たちとの関係にも見えるように、フロベールは「崇高」の伝統的な概念に疑問符を

打ち、崇高と卑俗とを分離するのではなく交錯させることで、その意味を問い直す。ジャン＝ルイ・カバネスも、この作品における「崇高」を、使い古された言説や紋切型の身ぶりに呼応する皮肉の記号と見なしている。特に、フレデリックが恋愛表現として「アルヌー夫人をミューズやマドンナに変容させ、情熱と神性への呼びかけを混同する時」<sup>26</sup>、つまり、恍惚とした神秘体験的な感情が沸き上がる時に、それを崇高と認識することが、かえって卑俗な感覚をもたらす。フレデリックが見るアルヌー夫人の崇高性には、「通俗的な崇高」という皮肉が裏付けられていた。しかし人が本能的に感じる宗教的直感と既成の価値観に捕われた言葉の世界との境界は、しばしば曖昧になる。凡庸な言葉に浸りきる恋人たちの恍惚が、逆に言葉を凌駕する崇高を示唆することもあるだろう。フレデリックは愛する人を前にして、確かに驚愕し、戦慄を覚え、不安に浸され、苦痛に苛まれ、身も溶けるような悦びを感じている。フレデリックの「あらゆる弱さ」が、崇高な何かへの感じやすさを生じさせる。その意味で、フレデリックは崇高を感じ、聖性を語る視点人物となりえているといえるのではないだろうか。

## 6. エピローグ—結論

『感情教育』には二つの比較的短い章がエピローグとして付されている。第三部六章、アルヌー夫人との最後の再会と、七章、友人デローリエと昔を懐かしむ場面である。アルヌー夫人との関係は、夫人が破産した夫とパリを去ってから十五年以上経った後の、最後の再会で確定される。

長い時を経て再会した二人は、過去と今との狭間へ、夢うつつの状態へと入り込む。「車や人や騒音の中を、何も耳には入れずに、まるで田舎で枯れ葉の絨毯の上を共に歩いているかのよう」(617)に歩を進め、昔の日々を語り合う。騒音に満ちたパリと静寂が保たれた田舎、石畳と枯れ葉の感触、此方と彼方が交錯する感覚が示され、現在と過去が互いに貫入していく。しかしこうして思い出を辿る恍惚に被さるようによって来たのは、ランプの光にアルヌー夫人の白髪を見た戦慄



だった。それでも、記憶と夢想の中で理想化されていた女性の老いという現実、自分が抱えていた聖域への鋭い認識をもたらす。

だからこそ、散歩から戻った自宅の部屋で、長く見つめてきた聖なる女性につき触れられる機会が来たと思われた瞬間、フレデリックは「かつてないほどの情欲」と共に「近親相姦の恐れのようなもの」と、「後から嫌悪を感じるのではというもうひとつの恐れ」（620）に襲われ、手を伸ばさずに踵を返す。この二重の「恐れ」<sup>27</sup>によって、聖なる女性への不到達性が確定する。もはや二人の間には言葉が見つからない。最後の別れを告げた後、「自分の魂はいつまでもあなたと共にある、天の全ての恵みがあなたの上にありますように！」（621）と、司祭が発する祈りを思わせる言葉と共に、「母のように」フレデリックの額に接吻し、長く白い髪を一房残して、アルヌー夫人は立ち去る。そして「それが全てであった（*Et ce fut tout*）。」（621）の一行が、長く宙吊りにされてきた恋愛関係の未完の完成をもたらす。

続く第七章のエピローグでは、フレデリックと友人デローリエが自分たちの人生を振り返り、「二人とも失敗だった、恋愛を夢見た男も、権力を夢見た男も」（624）と総括する。そしてデローリエはその理由を「自分は理屈過多で、君は感情過多だった」（624）と結論付ける。

フレデリックとアルヌー夫人、二人の感情は繋がったかと思われた瞬間に離れ、視線は交わしても胸の内を語ることはほとんどなく、平行線のまま手を伸ばしたり引いたりしながら、境界のない世界をさまよった。しかし「失敗」とされたこの恋愛関係には、生々しい恋愛感情が渦巻いていた。内的世界に入り込むほどに外的世界に対する諸感覚は鋭敏になり、恋を秘めようとするほどに感情は外界に迸り出て、周囲の世界が愛する対象となった。それが魂と肉体・物体が渾然一体となる「受肉」をもたらし、地上の愛と宗教的な愛を一体化させたのだった。

物語は、若き日のフレデリックとデローリエが「トルコ女の家」と呼ばれる娼館へ行き、結局何もせずに逃げ帰った出来事を回顧して繰り返される、「あの頃が一番よかった」という台詞で幕を

下ろす。この台詞はこの作品の発表当初から物議を醸し、「何も得ず、何も発見しなかった人間の空虚さを象徴」する、白痴的な笑いに充ちた結末とも評される<sup>28</sup>。しかし幻滅の世代にとって、一番よかった時代とは、まだ幻想を全面的に信じていられた、全てが可能だった時代として捉えられる。この台詞は確かに現在に対する虚無感を表してはいるが、虚無とは何もないことではない。フロベール作品の宗教性を論じたジゼル・セジャンジュールは、虚無こそが生の活性化に結びつき、欠乏こそが何か崇高なものを追い求める契機となると指摘する<sup>29</sup>。満足とは常に凡庸な幸福に結びつくもので、悦びは生の崇高な形である。そしてその崇高は対象がいなくてしか長続きしない。フロベールは「もし人間の不満な感情、生の虚無感が死に絶えてしまったら、私たちは小鳥たちよりも馬鹿になるでしょう」<sup>30</sup>と述べ、それに対して「嫌悪すべきブルジョワ的な満足」には、「月並みな幸福があるが、その俗っぽさは吐き気を催させる」<sup>31</sup>と記していた。

フロベール作品における崇高とは、ロマン主義文学のように言葉で「語られる」ものではなく、どうしようもなく「感じられる」ものであり、人間が本能的にそこに向かわずにいられないものだった。崇高に向かうとは、求めても到達し得ない何かに手を伸ばし続けることであり、獲得に向かうというより茫然と崇敬のまなざしを注ぎ続けることだった。フロベールは、人間のうちで最も詩的なものは人間の自然感情であり宗教感情だと述べていた<sup>32</sup>。恋愛感情もまた、そこに連ねられるだろう。フロベールはこの作品で、聖性を人間の弱さに繋いだ。「無気力な情熱」は、輝かしいものの前で、ただその前で逡巡することしかできない人間の弱さを露呈するものだった。そしてその弱さ、愚かさこそが、過剰なまでの感情や感覚によって、崇高なるものを語り得たのである。

本稿は2019年5月25日に行われた国際文化表現学会第15回大会で口頭発表した原稿に、大幅に加筆・修正を加えたものである。

## 注

- 1 1864年10月6日付ルロワイエ・ド・シャントピー嬢宛書簡 (Flaubert, *Correspondance*, tome 3, Gallimard, bibliothèque de la Pléiade, 1991, p.409)。以下、書簡は全てガリマール社プレイヤッド版による。sentimental という語は19世紀フランスにおいて主に「感傷的」と解釈され、嘲弄や軽蔑の意味で用いられていた。しかし1865年から70年頃にかけて、現代の意味に近い「感情にまつわる」という中立的な意味合いで用いられるようになった。
- 2 十四世紀のイタリアの詩人ペトルルカが生涯愛し続け、詩的灵感の源泉となった女性。抒情詩集『カンツォニエーレ』(1350)はラウラへの愛が主軸となっている。ペトルルキスムはフランスロマン主義にも強い影響を与えた。
- 3 Yvan Leclerc, *Gustave Flaubert, L'Éducation sentimentale*, Presses Universitaires de France, 1997, p.109.
- 4 1853年2月27日付ルロワイエ・ド・コレ宛の書簡で「凡庸な人々を美しくし、下劣なものを浄化するもの」として「信仰と愛」が挙げられている (*Correspondance*, tome 2, pp.250-251)。
- 5 美の仲介により真を知る快樂こそが表現の理想とされ、そこに聖性と崇高が見いだされる。1857年5月18日付ルロワイエ・ド・シャントピー嬢宛書簡 (*Correspondance*, tome 2, p.698) 参照。
- 6 Yvan Leclerc, *op.cit.*, p.37, p.38 参照。
- 7 Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, Librairie Générale Française, 2002。以下、本作からの引用については本文引用後にページ数のみを記す。訳は拙訳だが、生島遼一訳 (岩波書店、1971年) を参照した。
- 8 Introduction de *L'Éducation sentimentale* rédigée par Edouard Maynial, Garnier Frères, 1964, p.X. ヴィクトール・ブロンベールはフレデリックの根本的なテーマを「拒絶・逃亡・失敗」としている (Victor Brombert, *Gustave Flaubert*, Seuil, 1990, p.101 参照)。
- 9 Henry James, *Gustave Flaubert*, L'Herne, 1969, p.57.
- 10 1853年9月30日付ルロワイエ・ド・コレ宛書簡 (*Correspondance*, tome 2, 1980, p.446)。
- 11 パロディは、言葉を取り換えることで意味を滑稽にし、真面目なものを喜劇的なものにする。また卑俗な言説によって物事の真実や崇高性を示唆する働きを持つ。
- 12 大貫隆・宮本久雄・名取四郎・百瀬文晃 (編)『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002年参照。
- 13 今村武・橋本由紀子・小野寺玲子・内堀奈保子『不道德な女性の出現—独仏英米の比較文化』、南窓社、2011年、98頁参照。
- 14 フロベールはロマン主義的な世界を語る時、しばしば象徴的に青色を用いる：「今夜ようやく若い娘の夢に関するアイデアを書いてみました。まだあと二週間はこの青い湖を漕ぎ渡らなければなりません。」(1852年3月27日付ルロワイエ・ド・コレ宛書簡, *Correspondance*, tome 3, p.144.)
- 15 Victor Brombert, *op.cit.*, p.105.
- 16 Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p.158.
- 17 Flaubert, *Madame Bovary, Mœurs de Province*, Bordas, 1990, p.271.
- 18 見つめる対象との融合の恍惚については、フロベール自身がその「汎神論的能力」を自認し、作中で体験を語っている。拙著『フロベールの聖〈領域〉—「三つの物語」を読む』、彩流社、2013年、pp.29-30 参照。
- 19 ジョルジョ・アガンベン『洗神』堤康德・上村忠男訳、月曜社、2005年、p.108 参照。religionの語源は一般に、ラテン語で「結びつける」を意味する「レリゲレ religere」とされるが、アガンベンは逆に、越えられない深淵を前にした不安なためらいを示す「レレゲレ relegere」とする。
- 20 『感情教育』は三部構成で、一部と二部に6つ、三部に7つの章が組まれている。
- 21 アガンベン、前掲書、p.107 参照。

- 22 同書、p.112 参照。
- 23 Jean-Pierre Richard, *Littérature et sensation, Stendhal, Flaubert*, Seuil, 1954, pp.211-212 参照。
- 24 Carnet 19, F° 36, Flaubert, *Carnets de Travail*, Balland, 1988, pp.289-290.
- 25 金銭は妄想された幸福の実現手段や条件となる。フレデリックはボヴァリー夫人と同じく「理想の人生を金銭や物品で満たそうとする人物」で、小説のような恋愛と金銭的な豊かさを混同する。Françoise Gaillard, « Qui a tué Madame Bovary ? », dans *Flaubert, Etique et Esthétique*, Presses Universitaires de Vincennes, 2012, p.78 参照。
- 26 Jean-Louis Cabanès, « Sublime et Réalisme dans les Romans de Flaubert », dans *Flaubert Hors de Babel*, 2013, p.42 参照。
- 27 原文で用いられている近親相姦の「恐れ」(effroi) は、戦慄を伴う極めて強い恐怖を表し、もう一つの「恐れ」(crainte) はキリスト教用語で「神への畏敬」を含意する。
- 28 Federica Sforazzini, *L'image, la séduction, la rhétorique – Flaubert en sept essais*, Mimesis France, 2013, p.65 参照。
- 29 Gisèle Séginger, « L'Ontologie flaubertienne – une naturalisation du sentiment religieux », dans *La revue des Lettres Modernes, Flaubert 3, mythes et religions 2*, 1988, pp.69-70 参照。
- 30 1852年9月4日付ルイズ・コレ宛書簡 (*Correspondance*, tome 2, 1980, pp.151-152)。
- 31 1847年1月11日付ルイズ・コレ宛書簡 (*Correspondance*, tome1, 1973, p.425)。
- 32 1857年3月30日付ルロワイエ・ド・シャントピー嬢宛書簡 (*Correspondance*, tome 2, p.698) 参照。